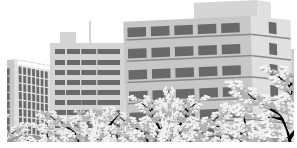
会員の広場



アイスランド紀行（抄）

野田　忠男（東京）

娘一家が住むロンドンを拠点とした小旅行で、夏のひと時を過ごすのは今年で3回目。「今年はアイスランドにするよ」と言ってきたのは春先のことだった。「老いては子に従え」で、計画は娘任せ。「氷の国だから日本の真冬のトレッキングを想定して準備をせよ、火の国だから水着も忘れずに」との指示に従って万端整えロンドンへと飛んだ。

旅程は北海道より一回り大きい島を一周するドライブ旅行。走行距離は1500㎞超。途上、滝8カ所、氷河湖、温泉3カ所、間歇泉を含む地熱地帯2カ所、海鳥（特にツノメドリ）の営巣地2カ所、ホエールウオッチング等々。以下は思い出のほんの一端である。

まずは氷。氷河湖ヨークルスアウルロウン。世界遺産でもある欧州最大のヴァトナ氷河が大西洋に崩れ落ちた所にできた氷河湖だ。水陸両用ボートで青色を帯びた大小さまざまな氷山の間を遊覧する。幻想的なアートのような光景は体感温度氷点下かという寒さを忘れさせる。しかし、氷河の末端が百年で6㎞以上後退し、そのスピードは近時加速しているというガイドの説明には、後戻りのない地球温暖化の脅威を実感させられ、身も凍る思いがした。

次は火。この島では数年に1度のペースでどこかの火山が噴火しているという。今回も出発の直前に空港の20㎞程の地帯での噴火が伝えられた。火山だらけということは温泉だらけということ。この国の住宅の90％で給湯と暖房は温泉で賄われているそうで、今回の8カ所の民宿すべてで温泉が味わえた。水着着用の露店風呂（というよりプール）も3カ所で堪能した。火山だらけなのは、この島がユーラシアプレートと北米プレートの境目でマントルの湧き出す「拡がる変動帯」に位置しているからだそうだ。いわば地球の裂け目（地元ではギャウという）が随所に走っている。このギャウは一年で2㎝ほど拡がっているそう。同行した3人の孫達には50年後に再訪して1mほど拡大したギャウを見とどけてほしいものだ。日本のホッサマグナもユーラシアプレートと北米プレートの境目に位置しているという説が有力らしい。ホッサマグナの命名者ナウマン博士が調査を始めたのが1875年で、今年は150年の節目に当たる。アイスランドが地球規模の文脈で日本とつながっている。

最後に氷と火のマリアージュ。それはこの島にその数1万を超えるといわれる滝の姿だ。今回間近で観察できた8つの滝はいずれも個性的で、それぞれ欧州一とか本国一と謳っているが、甲乙つけがたい。ただ一つだけ名を挙げるとすれば、均整のとれた美しさという点からゴーザフォス（神の滝）だろうか。ロンドンからの往復に搭乗したアイスランドエアー機に備えてあったエチケット袋には、この名瀑のイラストとともに、“You are hopefully not feeling like Godafoss.”とあった。

地球のありのままの姿、人知を超えた絶景に声をあげ続けた9日間であった。